

3年	総合的な学習の時間	「農園おうえん団！」		51時間
単元の目標	農園や野菜を販売する店の見学や農作業の体験、地域の農業を支える人々との出会い等を通して、畑（緑）のよさや都市農業の現状、生産者の工夫や思いを理解し、地域の産業の在り方について考えるとともに、地域の農業を支える活動を通して、自らの生活や行動に生かすことができるようにする。		【方向目標】 学習過程や指導の方向性。質的な評価、自己評価。	
単元末における具体的な児童の姿	<p>A 生産者の苦労や願い、地域を支える人の思いが分かり、農業と自分の生活の関わりから自ら課題を設定し、解決策を考える。考えを発信するなどすすんで周りに関わり、協働的に解決しようとするとともに、自分の生活に生かしている。</p> <p>B 生産者の苦労や願い、地域を支える人のしていることが分かり、設定した課題に対する解決策を考え、実践するとともに、自分の生活に生かそうとしている。</p> <p>C 生産者の苦労や願い、地域を支える人の存在が分かり、課題に対する解決策を選び、仲間と共に実践するとともに、自分の生活に生かせるか考えることができる。</p>	実際	<ul style="list-style-type: none"> ・自ら家庭で直売所の野菜を購入してもらって調理して食べてみたり、社会科の農業体験で収穫した大根を調理したりし、かつ記録をとるなど、実生活の中で課題解決に繋がる行動が見られた。 ・農園で取材したことを、自らスライドにまとめたり、休み時間に同じ課題の児童で集まって活動したりするなど、課外活動に取り組む姿が見られた。 ・自らの生活で苦手な野菜に挑戦する児童がいた。 ・他教科での学習と繋げて考えたことを発言する児童がいた。 ・探究のサイクルができた児童もいれば、自分が何をすると良いのか分からない（決められない）児童がいた。 	
個人間差異	手だて			効果
① 学習スタイルの違い	<p>①・課題解決の方法を自分で選ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利点/難点を理解した上で選択し、活動する。 ・きまりを明確にする。 ・情報を共有する方法を示す。 ・表現方法の個別選択。 			<p>○△</p> <p>○△</p> <p>◎</p> <p>△◎</p> <p>○</p>
② 生活経験の違い	<p>②・課題解決の方法を自分で選ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・利点/難点を理解した上で選択し、活動する。 ・きまりを明確にする。 ・情報を共有する方法を示す。 ・表現方法の個別選択。 			<p>◎</p> <p>○</p> <p>◎</p> <p>○</p> <p>○</p>
③ 感じ取り方の違い	<p>③・農業を体験する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・産業振興課の方の話を聞く。 ・自分たちの考えを伝え、それに対する反応（実際の声）を知る。 ・各家庭向けのアンケートを実施する。 ・児童の思考に関係すると想定される教材を適した時間に入れる。 			<p>△◎</p> <p>○</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>

<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・繰り返し校外へ取材に行ったため、児童の目的を意識した準備や安全に留意して行動することが身に付いた。 ・課題解決の方法を自分で選択することで、一斉指導では困難な調理の実習ができた。切干大根を「調理をするための指導」をするために教材として最適と分かった。火を使わず実食を伴わないため、教科学習で扱わない内容（調理）でも、衛生面（身だしなみ）や安全面の指導（包丁の扱い方）のみで確実に行うことができた（無論、一斉指導ではなく少人数であることが大きい）。 ・自分で活動を決め、予定を立てるという学習のサイクルでは、児童の忘れ物を心配することなく進められた。 ・教科学習だけでは見付けられなかった児童の良い姿、課題となる姿が見付けられた。 ・新たな地域の人財とのつながりができ、保護者にも繰り返し協力してもらうことで学級・学年の様子や学習内容への理解に繋がった。 ・授業内で把握している以上に、実際に行ってみた、やってみた、頑張るようになったなど、単元の目標である「自らの生活や行動に生かす」ことができるようになっていた。 	<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の材は、できうる限り前年度担当から具体的な情報を引き継ぎ、単元構想に生かせるようにするとよい。今回は夏季休業中に連絡を取り、計画を立てるなどしたが、遅すぎた。 ・児童も大人(教師、保護者)も、活動自体をゴールと捉える意識が強い。その感覚を変えるのは難しい。一定の達成感をもたせつつ、次なる課題をもって「探究」をするためには、他教科の学習を生かしながらポイントとして発表などの活動を入れ、それらを振り返り、目標に対してどうであったか考えさせた上で次の活動に向かっていくと良いのではないか。もしくは、学年の前半に個人探究の単元を設定して探究していくことと、学活との違いへの理解をある程度できた上で、集団で取り組むと良いのではないか。 ・協働的な学びの良さへの理解が十分でない実態では、一斉指導で話し合い活動を取り入れるべきであった。ICTツールで共有することが非常によくできた半面、内容として深まりを見せられなかったり、内容が一つ所に留まっていたりしたためである。 ・目標を達成しているかどうかを図ることは難しい。指導者がいかに言語化するか、引き出し、価値付けられるかによって児童自身の評価が変わることが分かった。
-----------	--	---

